

鶏頭

『新壑』  
35-3号

降る雪を重く覆りて眠ります  
亡夫の墓所の遠きを想ふ

足袋カバー編む夜の風に交りくる悔りも象づくるものゝ樂  
しさ

景鶏頭ゆつくり巡る夏の陽に灼かれつゝも風邪めく悪寒

母吾れを批判する少年の瞳と緋き鶏頭が同型の愛しみを  
持つ

花過ぎし紫陽花の景の風に裏返りその白さ程吾も清潔

何気なく聞きし言葉に意味持つと坂下り別れの際に思へり

少女

『新墾』  
35-6号

洗髪を夜風に曝す冷えにゐてかぎりなく饒舌は身内めぐ  
る

風に向き巻毛の少女の膨らますガムは海色の昏さに歪む

菊を抱く少女の降りゆきしバス中の香りに暫く目閉じて  
おり

閃かぬ私の智慧を慰撫しゆくは風とも異ふ何処より因果  
実は匂ふ

陽を吻える窓の硝子のきらめけば惜しむにはあらず冬の季

爪光らせて或夜の吾に距離持てば近よりがたし自らも

蠅の晚餐

『新墾』  
35-7号

糊きくし白きシートを這ひゆける一匹の蟻の峻巖なる夜

欠片のジヤムパン囲みて落着かなき蠅の晚餐は白き陶の皿

糸切れし凧の一瞬宙を舞ふたしかに自由は不自由につながる

春の果実みづくひかる夜を徹し識りたきものは人の真意も

展かれゆく明日ある事を信じるむフェルトのスリッパに繡す  
小花

暗きばかりの過去とは云えざり天に向き一斉に花開く木  
蓮

鉄粉

『新墾』  
35-10号

何処までも言葉貧しく別れ来て地下売場に購ふは枇杷の  
歳房

少年と母とを隔つ木の階あり上らむとして吾れの躊躇

組まれゆく鉄骨の間をくぐりし蝶がしたゝかに纏ひ来し鉄  
粉

人乗らぬボートが雨に打たれるて意志なき動揺を海は支  
ふる

雨の日の飛び込み台に立つ少年晩夏の海は乳を匂はす

強ひられて吾にはわれの長き忍従薔薇は自らの持つ色に咲  
く

晩夏

『新壑』

35-11号

人乗らぬボートは雨に打たれるて意志なき揺れを海は支ふる

雨の日に濡れし封書の届ききて掌に持たば家禽の重たさ

雨の日の飛び込み台に立つ少年晩夏の海は乳を匂はす

後に曳く影故踏まねばならず従列に下りて細き坂道

ぞ  
晩夏の海光りおり閉ざせしまゝに来ておのづと明るむころろ

逝く夏を手鏡に映して臥すと云ふその腕のいかに瘦せたる  
かは知らず